# 虚辞構文の極小主義的分析について

佐 藤 英 志

# On Minimalist Analyses of Expletive Constructions

Hideshi Sato

## 1. 序 論

生成文法研究の歴史において繰り返し議論されてきた論点のひとつに、(1) に代表される虚辞構文の派生がある[1]。

(1) a. There is a man in the garden.
b. There arrived a man.

この構文に関しては、統語論的かつ意味論的にきわめて興味深い特性が観察されている。その中でも、とりわけ顕著な特性を以下に列挙する。第一に、意味上の主語（本稿では虚辞関連要素（Assoc）と呼ぶ）が*be*動詞あるいは非対格動詞に後続する位置に置かれ、形式的主語位置には虚辞*there*が置かれている点で、非虚辞構文 (2) の語順とは異なる。

(2) a. A man is in the garden.
b. A man arrived.

第二に、Assocにどのような格が与えられているか、即ちどのような方法で格フィルターを満たしているかが明らかでない。第三に、Assocと主節Tの間にみられる一致は、その必要条件とされる指定部・主要部関係を満たしておらず、しかもその関係は長距離に及ぶ。

(3) There is likely to seem to be a man in the garden.

第四に、虚辞の*there*と*it*は相補分布している。

(4) a. **There* seems that a man is in the garden.
b. *It* seems that a man is in the garden.
c. *There* is a man in the garden.
d. **It* is a man in the garden.

第五に、Assocには定名詞句が許されないという、いわゆる定性効果がある。

(5) a. There is a man/ *the man in the garden.
b. There arrived a man/ *the man.

最後に、虚辞構文と非虚辞構文には解釈上の非対称性がある。

(6) a. There aren't many linguistics students here. (NOT>many)
b. Many linguistics students aren't here. (ambiguous)

統語論研究は、これらの現象に対して普遍文法の原理からの演繹的説明を試みてきたが、近年のミニマリスト・プログラム（MP）の発展に伴い、新たな説明の可能性が開けてきた。本稿ではMPの枠組みによる分析とその問題点を整理し、今後の研究に資することを目的とする。現在MPはChomsky (1999, 2000) を軸として理論的整備が進められているが、本稿ではChomsky (1995) の枠組を採用する。第2節ではChomsky (1986) からChomsky (1995) に至るまでの虚辞構文分析の足取りを簡潔に辿り、論点を明らかにする。第3節ではLasnik (1995a, 95b)、Groat (1995, 99) 等で主張されている代案を提示し、第4節で今後の検討課題を述べる。第5節で本稿を結ぶ。

英文学科

## 2．虚辞構文分析の歩み

### 2.1. Chomsky（1986）

Chomsky (1986)による虚辞構文と非虚辞構文の派生は以下の通りである。

（7）a. ___ is [SC a man in the garden]
　　b. ___ arrived [NP a man]

（8）a. There$^{i}$ is [SC a man$^{i}$ in the garden]
　　b. There$^{i}$ arrived [NP a man]$^{i}$

（9）a. a man$_{1}$ is [SC $t_{1}$ in the garden]
　　b. a man$_{1}$ arrived $t_{1}$

*be*動詞は小節（その主語としてAssocが基底生成している）を補部に取り、非対格動詞はAssocのNPを補部として取る。この共通のD構造からAssocが格フィルターを満たす派生が2通り可能であり、一方が虚辞構文（8）で、他方が非虚辞構文（9）である。（8）において、EPPを満たすために主節主語位置に*there*が挿入されており、それと連鎖を形成しているAssocに主格が転送される。（9）ではAssocが主語位置に繰り上がることでEPPを満たし、直接主格を受け取る。従って、虚辞構文と非虚辞構文の語順の差異は*be*動詞および非対格動詞の補文構造と格フィルターに帰着する(2)。また虚辞*there*はLFでAssocのA移動により置換され、完全解釈（FI）を満たす。その帰結として、（8）のS構造に対しては（9）と同一のLF表示が与えられ、そこでAssocと主節Tが指定部・主要部関係を持つことで一致が具現する。また非顕在的移動も顕在的移動と同一の移動の制約に従うと仮定すれば、たとえば（10）は長距離移動が許されるS構造（11）と同一のLF表示を持つため、長距離一致が可能であると説明される。

(10) There *is* likely to seem to be *a man* in the garden.

(11) A man$_{1}$ is likely to seem to be $t_{1}$ in the garden.

### 2.2. Chomsky (1991)

しかし、Chomsky（1986）のシステムには（6）（(12) として再掲）の対比が説明できないという問題点がある。

(12) a. There aren't many linguistics students here. (NOT>many)
　　b. Many linguistics students aren't here. (ambiguous)

(13) [Many linguistics students]$_{1}$ aren't [SC $t_{1}$ here]

*there*置換を仮定すれば、(12a)、(12b) ともに同一のLF表示（13）を持つために、解釈の差異がないことを予測してしまう。Chomsky (1991) では、この問題を回避するためにLF接辞の仮説を提案する。即ち、虚辞*there*はLFにおける接辞であり、LFでAssocが*there*に付加することでFIを満たす。その帰結として、(12a) のLF表示（14）ではAssocからのc-統御関係がないことから（12a）の事実が説明されるとする(3)。

(14) There-[many linguistics students]$_{1}$ aren't [SC $t_{1}$ here]

### 2.3. Chomsky (1993)

MPによる文法システムの再構築は、虚辞構文分析が立脚している原理に抜本的な変革をもたらした。第一に、MPでは格フィルターが格素性の照合に還元された。より具体的には、名詞句の形式素性(とりわけ格素性）は同じく格素性を持つ機能範疇と指定部・主要部関係に入ることで、LFまでに照合・削除されなければならない。さらに、移動はその動機が厳しく規定され、Greedを遵守しなければならない。従ってChomsky（1991）の枠組みとは異なり、*there*がFIを満たすためだけのAssocのA移動は許されない。（7）-（9）の派生（(15) - (17) として再掲）を再考してみよう。

(15) a. ___ is [SC a man in the garden]
　　b. ___ arrived [NP a man]

(16) a. There is [SC a man in the garden]
　　b. There arrived [NP a man]

(17) a. a man$_{1}$ is [SC $t_{1}$ in the garden]
　　b. a man$_{1}$ arrived $t_{1}$

(15) の基底構造において、Assocの*a man*が削除されるべき格素性（Chomskyは主格と仮定）を持っている。この派生の段階からAssocの格素性を削除する方法に（16）と（17）がある。(16) において、まず*there*が顕在的に主語位置に挿入されてEPPが満たされた後、Greedに従い、*a man*が自らの格素性を照合するために非

顕在的に*there*に付加する。その結果、主節Tと指定部・主要部関係を持ち、Assocの格素性が照合・削除され、かつ一致する。一方（17）では、Assocが顕在的に主語位置に繰り上がりEPPを満たし、かつ格素性を照合してTと一致する。次に（4）の例（(18) として再掲）を考察してみよう。

(18) a. **There* seems that a man is in the garden.
b. *It* seems that a man is in the garden.
c. *There* is a man in the garden.
d. **It* is a man in the garden.

(18a) において、Assocの格素性と$\phi$素性の両方がすでに埋め込み節内で照合されているため、Greedに基づき移動が駆動しない。結果的に*there*が解釈できずにsemigibberishとして排除される。これに対して、(18b) では$\phi$素性と格素性の両方を帯びた虚辞*it*がTの格素性と$\phi$素性との照合関係に入るので派生が収束する。逆に（18c）では*it*がTの格素性と$\phi$素性を照合・削除してしまうため、Assocの格素性を照合できず派生が破綻する。このようにMPの枠組みに至り、虚辞の相補分布が適切に説明されるようになった。なおこのシステムに基づけば（19）の例も（18a）の類例として正しく説明できる[4]。

(19) a. *There seems to a strange man that it is raining outside.
b. *There strikes John/someone that Mary is intelligent.

### 2.4. Chomsky (1995)

Chomsky（1995）では、さらに新しい仮説がいくつか提案されている。第一に非顕在的移動はAttract-Fであり、最小限の移動として素性のみが誘引される。第二に素性には解釈可能素性と解釈不可能素性があり、後者のみがLFまでに照合され削除されなければならない。DPの$\phi$素性は前者の、格素性は後者の一例である。これら仮説により虚辞構文がどのように説明されるかを再考してみよう。(15) - (17) を (20) - (22) として再掲する。

(20) a. ___ is [SC a man in the garden]
b. ___ arrived [NP a man]

(21) a. There is [SC a man in the garden]
b. There arrived [NP a man]

(22) a. a man$_1$ is [SC t$_1$ in the garden]
b. a man$_1$ arrived t$_1$

*there*は意味素性も格素性も持たない範疇Dであり、TのEPP素性を照合する役割のみを持つと仮定する。(20) の派生の段階から、(21) と (22) の二通りの派生の手順が可能である。(21) において、まず*there*の顕在的挿入によりTのEPP素性が照合される。つぎにLFにおいて主節Tは解釈不可能な主格素性と$\phi$素性を照合するために、やはりAssocの格素性を誘引して照合する。結果両者の解釈不可能素性はすべて削除される。

(23) There T is [SC man in the garden]
~~<EPP>~~
~~<Case>~~ ~~<Case>~~
~~<$\phi$>~~ <$\phi$>

一方（22）において、主節TのEPP素性はAssocの顕在的移動によって照合されている。また解釈不可能な主格素性と$\phi$素性も誘引されたAssocの格素性によって同時に照合される。なお以下の例はすべて、Assocの格素性がすでに照合済みであり、Tの主格素性を照合することができないため排除される。

(24) a. *There seems that a man is in the garden.

(25) a. *There seems to a strange man that it is raining outside.
b. *There strikes John/someone that Mary is intelligent.

このようにして、Attract-Fの仮説は虚辞構文の分析に新たな光を当てることとなったが、これにより説明的妥当性が高まったといえる。第一に、LF接辞の仮説が廃止されるに至った。虚辞構文において誘引されるのがAssocの素性のみなので、もはや*there*とAssocの素性とは接辞とhostの関係にはなりえない。次に、(12) の対比（(26) として再掲）に加えて (27)-(29) の統語的な差異も包括して説明できる[5]。

(26) 作用域
a. There aren't many linguistics students here (NOT>many)
b. Many linguistics students aren't here

(ambiguous)

(27) 照応形束縛

a. *There seem to each other$_1$ to be some applicants$_1$ eligible for the job.

b. Some applicants$_1$ seem to each other$_1$ to be eligible for the job. (Dikken 1995)

(28) 束縛変項

a. *There seems to his$_1$ mother to be someone$_1$ eligible for the job.

b. Someone$_1$ seems to his$_1$ mother to be eligible for the job. (ibid.)

(29) 否定極性表現

a. *There seem to any philosophers [t to have been no good linguistic theories formulated]

b. No good linguistic theories seem to any philosophers [t to have been formulated] (Lasnik 1995b)

(26)-(29) の虚辞構文 (a) では、Tの主格素性を照合するために必要とされているのがAssocの形式素性のみである。従って、意味素性は移動せずに元位置に残っているはずであり、当然Assocは元位置で解釈されることになる。一方、(26)-(29) の非虚辞構文 (b) では、Tの主格素性を照合するために移動しているのがAssocの範疇であり、これは意味素性を含む。従って移動先の主語位置で解釈を受けることになる。

次節では、Chomsky (1995) に対する代案としてLasnik (1995a, b) とGroat (1995, 99) を検討する。

## 3. 代　案

### 3.1. Lasnik (1995a, b)

Lasnik (1995a, b) は虚辞*there*自体が格を持つと仮定している[6]。Lasnik (1995a, b) はLF接辞の仮説に基づいて議論しているが、これをAttract-Fの枠組みで再解釈して虚辞構文の派生を再考してみよう ((20)-(22) を (30)-(32) として再掲する)。

(30) a. ___ is [SC a man in the garden]

b. ___ arrived [NP a man]

(31) a. There is [SC a man in the garden]

b. There arrived [NP a man]

(32) a. a man$_1$ is [SC t$_1$ in the garden]

b. a man$_1$ arrived t$_1$

(30) の派生の段階から二通りの派生が可能である。(31) において、*there*が顕在的に主語位置に挿入されることでEPPが満たされるが、*there*に格素性があるので同時にTの主格素性も照合される。この場合、Assocの*a man*は*be*動詞および非対格動詞との間で部分格 (Belletti 1988) を照合すると仮定する。さらにAttract-Fによって非顕在的にAssocの$\phi$素性が誘引され、Tの$\phi$素性を照合・削除する。(32) では、Assocが顕在的に主語位置に繰り上がっている。従って、Vの部分格は随意的であると仮定する必要がある。Vの部分格がないときに限り、Assocは顕在的に主語位置に移動することでEPP素性を照合し、自らの格素性とTの主格素性と$\phi$素性を照合する。従って、Lasnikの仮説では二つの構文の語順の差異は部分格の随意性に帰着することになる。次の例を考えてみよう。

(33) a. *There seems that a man is in the garden.

b. *There seems to [a strange man][that it is raining outside]

c. *There strikes John/someone that Mary is intelligent.

Chomsky (1995) の仮定では*there*が格素性を持たないので、Assocが自らの格素性を照合した段階で、もはやTの格素性を照合する可能性がないことで排除される。しかし、Lasnikの仮定ではこれらの派生を無条件で排除することができない。(33) において、*there*が格素性を持つと仮定すると、Assocの$\phi$素性を誘引してTの$\phi$素性を照合する派生が許されるからである。そこでLasnik (1995b) は、ある要素 (素性の束あるいは構成素) がA移動するためには、その要素に可視的な格がなければならないとの制約を仮定する。即ち、(33) においてAssocの格素性がすでに照合されているので、Assocの$\phi$素性はAttract-Fの対象にはならない。結果的にTの$\phi$素性が照合されないため派生が破綻することになる[7]。またこの制約により、次の例の非文法性も説明される。一旦中間位置

で格素性を照合している要素を、さらにEPPを照合するために移動できないからである[8]。

(34) a. *The belief [a man to seem [t' is [t here]]]
b. *John BELIEVEs [a man to seem [t' is [t here]]]

### 3.2. Groat (1995, 99)

Groat (1995, 99) も*there*に格素性があると仮定する。その証拠として、第一にChomsky (1995) では以下の対比が説明できない[9]。

(35) a. There$_1$ seems t$_1$ to be a problem.
b. *There$_1$ seems there$_2$ to be a problem.

二つの派生はNumerationが異なるので、両者の派生を比較して経済性の条件で区別することはできない。またMergeがMoveよりも経済的であるとの仮定から、(35b) の二つの*there*の挿入はそれぞれEPP素性を照合するための最適な派生であり、この点からも (35b) を排除することはできない。しかし*there*に格素性があると仮定すれば、(35b) を排除することが可能である。埋め込み節の*there*はEPP素性を照合するものの、それ自身の格素性が照合できないからである。また次の証拠が興味深い。

(36) a. There looks [as if there is a problem with this analysis].
b. There look [as if there are problems with this analysis].
c. *There looks [as if there are a problem with this analysis].

(36) において、主節Tと埋め込み節Tの両方がひとつのAssocと多重に一致している。これはひとつのAssocが埋め込み節を越えてTの$\phi$素性を照合している結果と考えることができる。しかし、Assocの格素性は一度だけしか照合に参画できないので、*there*に格があると仮定しない限り複数のTの主格素性を照合することはできない[10]。次に (33) の例を再考してみよう ((33) を (37) として再掲)。

(37) a. *There seems that a man is in the garden.
b. *There seems to [a strange man][that it is raining outside]
c. *There strikes John/someone that Mary is intelligent.

Lasnikは節を越えてのAssocの$\phi$素性の移動を、格の可視性の制約を仮定することで阻止していた。しかしGroatは*that*が何らかの$\phi$素性を持つと仮定することで、(37a) を最小連鎖条件 (MLC) の一例として排除する。一方、*as if*は範疇はCだが、$\phi$素性を持たないと仮定する。従って、(36a, b) の場合、CPを越えての$\phi$素性の照合がMLCに抵触せず可能となる。次に (37b) は、少なくとも記述的な一般化として、(38) と同じ理由で排除されると考える。しかし、この分析では (37c) が排除できないという問題点がある。

(38) *who$_1$ does it seem to t$_1$ that it is raining

## 4. 今後の研究課題

### 4.1. 定性効果

ここまでのところ、定性効果 (DE) についてはほとんど言及してこなかった。DEの説明としては、Diesing (1992) の写像仮説 (MH) が有力である。概略、LFでVP内に位置する要素はnuclear scopeに、VPの外に位置する要素はrestrictive clauseに写像されることを規定したもので、前者には存在的解釈 (∃) が、後者には総称的解釈 (∀) が与えられる。例として、(39) における主語の解釈の対比を見てみよう。

(39) a. Firemen are *available*. (∃&∀)
b. Violists are *intelligent*. (∀only)

この解釈の差異を引き起こしている決定的な要因は、それぞれ選択されている述語が (39a) ではstage-level述語、(39b) ではindividual述語であることである。Diesing (1992) は、stage-level述語の主語はVP指定部に基底生成するのに対し、individual述語の主語はIP指定部に基底生成すると仮定する。従って、(39a) ではLFにおいて主語 (の痕跡) がVP内にあるため、MHにより∃が可能である。しかし (39b) ではLFにおいて主語がVPの外にしかないため、MHにより∃が許されない。

ここで虚辞構文のDEの説明に戻ろう。以下がDEの典型例である。

(40) a. There is (are) a/ some/ a few/ many/ three fly (flies) in my soup.
b. *There is (are) the/ every/ all/ most

fly (flies) in my soup.

Diesingは不定名詞句をweak NP、定名詞句をstrong NPと分類している。従ってDiesing流には、DEとはAssocにはweak NPのみが許される現象であると還元できる。このMHによるDEの説明は、Chomsky（1995）のAttract-Fの仮説とは整合性がある点が重要である。Attract-Fの仮説のもとでは、主節Tに誘引されるのがAssocの形式素性のみであり、意味素性を含む範疇はLFで元位置、即ちVP内に残っている。よってMHに従い、Assocには∃のみが与えられることになる。strong NPは元来特定的（specific）な意味を持つため、∃のみが与えられる位置には生起できず、DEが生じると説明できる(11)。

一方、Lasnik（1995a, b）とGroat（1995, 99）の仮説を採用する場合は、若干注意が必要である。即ち、MHとの整合性を保つためには格照合のシステムに修正を加える必要があると思われる。Belletti（1988）は部分格が内在格であり、D構造で$\theta$役割を伴って補部に与えられると主張している。しかしLasnikとGroatは部分格が構造格であると仮定している(12)。構造格は一般に機能範疇の指定部で素性照合されると仮定されており、実際Lasnik（1995a）は、部分格がAgro指定部で素性照合されるとの可能性を示唆している。しかし、この仮定はMHの生み出す予測とは矛盾する。AssocがLFでVPの外側の位置に生起するため、∀の解釈を許すstrong NPも許されることになる。この問題点を回避するためには、構造格の照合システムを精緻化する必要がある。例えばstrong NPの構造格はAgro指定部で、weak NPの構造格は元位置で照合されると仮定すれば、DEを予測することが可能になると思われる。これに関しては以下の例が参考になる。

(41) a. I read every/ each/ most book (books) that you did.
　　b. *?I read many/ few/ two/ $\phi$ books that you did.

(42) a. Who did you see a/ many/ several/ some/ $\phi$ picture(pictures) of?
　　b. *?Who did you see the/ every/ most/ each picture (pictures) of?

概略、MPの枠組みでは、先行詞包含削除（Antecedent Contained Deletion: ACD）は目的語NPが対格照合のためにAgro指定部に移動することで認可され、目的語NPからの摘出が許されないのは指定部要素からの摘出を制限するCondition on Extraction Domain（CED）に抵触しているからと説明される。従って、(41)-(42) の対比はweak NPが元位置で対格照合されている可能性を示唆していると思われる。

### 4.2. 虚辞の素性構成

本稿で論じたように、*there*に格素性を認めるか否かが、今後最大の論点になるであろう。しかし本当に*there*は格素性を持つのだろうか。Lasnik（1995b）では次の対比を証拠のひとつとして挙げている。

(43) a. Someone arrived.
　　b. There arrived someone.

(44) a. Someone laughed.
　　b. *There someone laughed.

Chomsky（1995）の分析では（43）と（44）の対比は説明できない。仮定では（44）の自動詞の場合でも主格素性が照合できると予測されるからである。一方*there*が格素性を持つと仮定すれば、（43）ではAssocが部分格を照合できるが、（44）ではAssocの格素性が照合できないという理由で排除できる。しかし、アイスランド語の他動詞虚辞構文（45）では虚辞と他動詞主語が共起しており、（43）と（44）の対比はむしろ英語に特有の現象であり、何らかのパラメータに帰着すると考えるべきであろう。

(45) Það kyssti einhver Mariu
　　there kissed someone Mary
　　'Someone kissed Mary.'

次に、最近の動向では、EPPの破棄を推進する論考が展開されており（Boškovic 2002）、(35)の例（(46) として再掲）はそもそも埋め込み節に*there*を挿入する根拠が存在しないことから説明できるかもしれない。

(46) a. There$_1$ seems t$_1$ to be a problem.
　　b. *There$_1$ seems there$_2$ to be a problem.

そうなると、*there*に格素性を仮定する根拠は、今のところ（36）だけに絞られる。このデータ

の判断の妥当性も含めて再検討が必要であろう。また*there*が格素性を持つと仮定すると、虚辞の相補分布が説明できなくなるという経験的な問題がある。

(47) a. **There* seems that a man is in the garden.
b. *It* seems that a man is in the garden.
c. *There* is a man in the garden.
d. **It* is a man in the garden.

(47d) においてNumerationに虚辞*it*が含まれるときは*be*動詞が部分格を持たないと仮定しなければならない。またそもそも、虚辞に与えられている格は何格なのか、一筋縄ではいかない問題も孕んでいる。

## 5. 結　語

以上、本稿ではMPの枠組みでの虚辞構文の分析を振り返り、その論点と分析の問題点を整理した。とりわけ、*there*に格素性があると仮定することの問題点を指摘し、今後の課題として格のシステムの見直しと、写像仮説との整合性を図ることの必要性を示唆した。

---

## 註

(1) 本稿でいう虚辞構文とは、特別な言及がない限り虚辞*there*を含む構文を指す。また虚辞構文に意味的に対応し、虚辞を含まない構文を非虚辞構文と呼ぶ。

(2) 連鎖に基づく束縛関係から定性効果（5）を説明する試みとしてはSafir (1985) がある。

(3) しかし定義上、*there*に付加した位置からの c-統御は可能であり (May 1985)、また一般に移動により形成された連鎖はc-統御関係にあるべきなので、この分析には問題がある。

(4) (19)はECPを満たしているのでChomsky (1991) の枠組みでは説明ができない。

(5) Dikken (1995) では次の対比も同種のものとしてあげている。
(i) a. There might only be one man in the garden.
b. *One man might only be in the garden.

(6) この立場はLasnik (1992) 以来一貫している。またMartin (1999) もEPPを破棄する文脈から同様の仮定をしている。

(7) またこの格の可視性の制約を仮定すると、次のような単純な場合の扱いが問題になる。
(i) There is a man here.
部分格を照合しているAssocの素性は移動の対象にならないと予測されるので、Tの$\phi$素性を照合できなくなってしまう。Lasnikは部分格は照合後もLFで解釈に関与するため可視的であると仮定し、この問題を回避している。またGroat (1999) は格の可視性を仮定しない説明を提案しているが、(33c) を説明できないという問題点がある。

(8) (34a)における*BELIEVE*は、動詞*believe*とは対格を持たない点でのみ異なる動詞を一般化した表記である。

(9) この対比は、Lasnik (1995a, b) でも*there*に格素性がある証拠として採用されている。

(10) この事実は、一見Lasnikの分析への反例になると思われる。一度格を照合したAssocが埋め込み節を越えて$\phi$素性照合に関与しているからである。しかし、Lasnikの仮定では部分格は照合後も可視的であるので（註7）、その$\phi$素性が重複して照合に関与することが許されることになる。

(11) 虚辞構文にはstage-level述語しか許されないという事実も重要である。これについては、小節の内部構造が異なるためにMLCなどの制約が関与している可能性がある。
(i) a. There are carrots in the refrigerator.
b. There are chili peppers available.
c. There are pumpkins visible on the vine.
(ii) a. *There are carrots nutritious.
b. *There are chili peppers spicy.

c. *There are pumpkins heavy.

(12) しかし註（7）で言及しているように、部分格は内在格としての特徴を持つことが決定的な仮定になっており、見解は必ずしも一貫していない。

---

## 参考文献


Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives," *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.

Boškovic, Zeljko (2002) "A-Movement and the EPP," *Syntax* 5, 167-218.

Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*, Praeger, New York.

Chomsky , Noam (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. Robert Freidin, 417-454, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1999) "Derivation by Phase," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 18, MIT Working Papers in Linguistics, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries," in *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, MA.

Dikken, Marcel den (1995) "Binding, Expletives, and Levels," *Linguistic Inquiry* 26, 347-354.

Groat, Eric M. (1995) "English Expletives: A Minimalist Approach," *Linguistic Inquiry* 26, 354-364.

Groat, Eric M. (1999) "Raising the Case of Expletives," in *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 27-43, MIT Press, Cambridge, MA.

Lasnik, Howard (1992) "Case and Expletives: Notes toward a Parametric Account," *Linguistic Inquiry* 23, 381-405.

Lasnik , Howard (1995a) "Case and Expletives Revisited," *Linguistic Inquiry* 26, 615-633.

Lasnik , Howard (1995b) "Last Resort," in *Minimalism and Linguistic Theory*, ed. by Shosuke Haraguchi and Michio Funaki, 1-32, Hituzi Syobo, Tokyo.

Martin, Roger (1999) "Case, the Extended Projection Principle, and Minimalism," in *Working Minimalism*, ed. Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 1-25, MIT Press, Cambridge, MA.

May, Robert (1985) *Logical Form: Its Structure and Derivation*, MIT Press, Cambridge, MA.

Safir, Kenneth (1985) *Syntactic Chains*, Cambridge University Press, Cambridge.